



年頭のご挨拶

金澤 秀子

日本分析化学会会員の皆様、年頭にあたり謹んで新年のご挨拶を申し上げます。旧年中は本学会の活動にご支援ご協力を賜りましたこと厚く御礼申し上げます。改めまして会員の皆様の本年的ご多幸とご健勝、ご研究の発展を心よりお祈り申し上げます。

昨年10月に、内山前会長の後を受けまして、歴史ある日本分析化学会の会長を仰せつかりました。前会長の残務期間という短期間ではありますが、設立70年近い本学会において初めての女性会長ということになり、重責に身が引き締まる思いです。

記憶に新しいことと思いますが2020年のノーベル化学賞は、CRISPR/Cas9によるゲノム編集技術の発見によりJ. A. Doudna博士とE. Charpentier博士の2人の女性研究者が受賞しました。ノーベル賞の授賞者のうち女性は僅か3%であり、様々な化学系学会の調査においてもGender gapは改善されていないと言われています。特に日本は女性研究者の割合が諸外国と比べても低いことが知られています。本学会では、2013年に女性研究者ネットワークが設立され、年会や討論会の際に毎回セミナーを企画して活動しており、2015年にはAnal. Sci.誌で女性研究者の特集号“Cutting-Edge Analytical Chemistry Research by Women Scientists”が上梓され、2018年には新たに「女性Analyst賞」を設立するなど、ダイバーシティ推進に力を入れてきました。今後も女性研究者も含め、分析化学分野の若い研究者を応援する活動に注力することで更なる活性化を図っていきたいと思っています。

2020年はCOVID-19の世界的な流行により社会・経済活動が大きく変化しております。昨年の年会は初めてのWeb開催でしたが、実行委員の多大なるご尽力により盛会裏に終了しましたことは学会として大きな財産になりました。未曾有の危機ではありますが、短期的な対応のみにとらわれず、わが国が世界から遅れているデジタルトランスフォーメーション(DX)推進の好機ととらえ、科学を支える学会の一つとしても積極的に情報発信していくことが重要と考えます。これまで本学会では、2018年、2019年の年会の産業界シンポジウムにおいて「AI, MI時代への期待と課題I・II」を取り上げてきました。AIやビッグデータの活用が本格化している中で、IoTやマテリアルズ・インフォマティクス(MI)などの導入が進んでいます。シンポジウムでは、各企業のコンピュータサイエンスの取組み事例を紹介し、今後の活用、展開、課題について会員相互が議論する機会を設けました。今後も大きな課題の一つである人材育成も含めて、産官学が一堂に会して自由に議論する場として学会を大いに活用して頂きたいと思っています。

現在、本学会は新しい時代に対応するため、出版の電子化をはじめ、運営方針や活動等の見直しを図り、次のステップへ向けて大きく舵を切る準備をしています。私自身は、中村会長、岡田会長、内山会長と3名の会長の下で副会長を務めてきました。微力ではございますが、副会長や理事等の役員の方々、そして事務局職員の方々の協力のもと、会員の皆様が楽しく活発に情報交換できる研究活動の場として、分析化学会の発展のために全力を尽くす所存でございますので、ご支援ご協力を賜りますようどうぞ宜しくお願い申し上げます。

[Hideko KANAZAWA, 慶應義塾大学薬学部, 日本分析化学会会長]